

守矢の魔女

すだち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷の冬。

年末の神事の準備に忙しい守矢神社に、紅魔館の魔女が訪れる。

突然の訪問に面食らう東風谷早苗に、パチュリー・ノーレッジは直々の『ある依頼』をするのだった。

「お願い早苗。貴女の力で、この淫らな気持ちを浄化して」

目次

第1話	1
第2話	11
第3話 (最終話)	20

第1話

「むきゅー。酷い目に遭ったわ」

涙目でこちらを睨み付けて来る、それは少女の姿をしていた。いや、人の形をしているからといって人間だとは限らない。常識の通用しない場所、それがここ幻想郷なのだ。

ともあれ、彼女が空から落ちて来た事実には変わりはない訳だが。

「もう、何なのよコレ？ 硬いし痛いし重いし、最悪な気分だわ」

紫色の髪に同じく紫色の服、更には紫色の帽子まで被ったその少女は、忌々しげに身体に絡み付いた鉄の輪を指差し言ってくる。何か見覚えがあると思ったら、それは先程諏訪子が投げた輪っかだった。

つまりはこういうことか。一見あらぬ方向に飛んでいったように見えた弾幕は、その実彼女を捉えていたのだ。何故かまでは分からないが、恐らくは「仕様」みたいなものなのだろうと、早苗は無理矢理自分を納得させた。

(にしても、運の悪い方ですね)

「ちよつと貴女。ぼさつと見てないで、外すの手伝ってくれないかしら？」

重いし絡み付いて訳が分からないわ。眩暈がしそうなよ」

(しかも尊大不遜なのに非力で不器用で虚弱体質とききましたか。どんだけ属性増やせば気が済むんでしようこのヒト)

「？ 何よ？ 私の顔に何か付いてる？」

「いいえー。別に何もー」

何も考えていない振りをして、早苗は全身紫づくめ少女から鉄の輪を外してあげた。確かに重いが、両手で持てない程ではない。

「ふう。ありがとう、助かったわ。貴女、見かけによらず力持ちなのね」

「いえ、多分人間の女子の平均くらいだと思いますけど」

「あら、そう？」

それにしても、一体何だったのかしら。飛んでたらコレがいきなりぶつかって来たのよ。不意打ちにも程があるわ。危うく事故死する

ところだったんだから！

犯人見つけたらタダじゃおかないわ。一生残る傷を身体に刻み込んであげる……！」

「うーん。本人に悪気は無かったというか全く想定外の事態だったと思うので、できれば穏便に済ませていただきたいのですが。」

ちなみにその犯人、今正に事故死しそうな感じだったりしますけどねー」

そう応えて早苗は、少女の足下を指差した。

「あーうー」

たまたま着地点に居たのだろう。或いは、自業自得の報いを受けたのか。

彼女の真下には、諏訪子がぺしゃんこに潰れて倒れていた。ヒキガエルならぬ、轢かれ蛙の完成である。

「……………」

「どうします？ トドメ刺しちゃいます？」

私で良ければ、消極的に協力させていただきますけどもー」

「……やめとくわ」



それはそうと、と改めて少女は切り出した。

「洩矢諏訪子が居るってことは、ここが守矢神社なのかしら？」

麓の巫女に聞いて来たんだけど、山に登ったこと無いから場所が曖昧だったのよね」

「はいいかにもここは守矢神社ですよ。」

でもって私が巫女の東風谷早苗です。これでも神の眷属なんですよっ」

少女の質問に、胸を張って早苗が応えると、

「そう——貴女が、東風谷早苗なのね。」

どうりで、博麗霊夢と似たような服装をしている訳だわ」

口端に薄っすらと笑みを浮かべて、彼女は言った。

「はじめまして。私はパチュリー・ノーレッジ。紅魔館の魔法使いよ。」

東風谷早苗。今日は貴女に用があつて来たの」

「ふえ？ 私に、ですか？」

パチュリーと名乗った彼女の言葉に、早苗は面食らった。

今まで神奈子や諏訪子を訪ねに来た人間や妖怪は沢山居たが、自分目当てに来る客はほとんど居なかったからだ。ましてや、紅魔館に知り合いなどは居ない。

「そうよ。貴女でないと困るの。」

ねえ早苗。私の言うこと、聞いてくれるかしら？」

寒風に飛ばされそうになった帽子を押さえながら、パチュリーは静かに尋ねて来る。

その透明な紫色の瞳からは、いかなる意図も感情も読み取れない。まるで鏡を見ているかのように、早苗自身の姿だけが映し出されていた。

季節は冬。

誰もが過ぎ逝く秋を惜しみながら、遥か遠い春を待ち焦がれる季節。

寒空の下、守矢の巫女と紅魔の魔女は、運命的な出逢いを果たしたのだった。

守矢の魔女

所変わって守矢神社社殿。

早苗がお茶を淹れて戻ると、パチュリーと神奈子が向かい合って何やら話していた。

「——だからアレはやり過ぎだと」

「いやあ、まさかあんな大袈裟なことになるなんて思ってもいなかったのよ。」

「……しっかしあんたもしっこいねえ。あの件についてはこの間謝ったじゃない」

「魔理沙にはね。私は聞いてない」

「嘘つけ。無線で連絡取り合ってたくせに。」

いいだろもう。温泉も沸き出したことだし、垢と一緒に水に流して

よ……つと、早苗」

「粗茶ですが、どうぞ」

「ありがとう。早苗の淹れてくれたお茶はいつも美味しいわね」

湯呑みを差し出し、早苗は神奈子の後ろに控える。

触らぬ神に祟り無し。あまり楽しい話じゃないようだし、無理に会話に参加する必要も無いだろう。

「むきゅ……私、どちらかと言うと紅茶派なんだけどね。

でも、これはこれで美味しそうだわ」

「お茶菓子もありますから遠慮なくどうぞ。生憎と和菓子しかありませんが」

「あ、それは大丈夫。私、紅茶のアテに和菓子食べたりしてるから」

「ああ、そうなんですか……」

言いながら、パチュリーは湯呑みに手を伸ばした。

触れた瞬間「熱っ」と悲鳴を上げ、それから「何でコレには取っ手が無いのかしら？ 客人を火傷させる気？」と文句を零す。

その後ふーふーと息を吹き掛け、十分に冷ました上でようやく湯呑みを手を取った。

「——ぬるいわね」

「ぶっ……！」

一口飲んでパチュリーが漏らした当然の感想に、とうとう我慢できなくなったのか、神奈子がお茶を吹き出した。早苗は慌てて、布巾を取りに台所に戻る。

「汚いわね」と神奈子を一睨みしてから、パチュリーは再びお茶を口に含む。音を立てずに飲むのは、紅茶のマナーを遵守してのことだろう。

「だけど、口の中にじんわりと染み渡っていく味わいだわ。これが侘び寂びの精神つてものかしら」

「おっ、あんたも理解したかい？ 西洋の魔女さんには難しいだろうと思ってたんだけどね。」

紅茶の甘い香りも良いが、緑茶に込められた和の心もなかなかオツなもんだらう」

「そうね。混ぜたらすごい飲み物になりそう」

(いやそれはどうかと思いますが)

胸中でツツコミを入れながら、早苗は床を拭き始める。畳敷きの床は染みが付き易い。この間も諏訪子が居眠りした際に垂れた、涎の痕ができたばかりだ。

そんな早苗の様子を見て用件を思い出したのか、パチュリーは「むきゅっ」(↑※ポンツ)と手を打った。

「そうだ、こんなことしてる場合じゃないの。」

その巫女さんの手を借りたいんだけど、構わないかしら？」

「駄目だ、と言いたいところではあるけどな。」

早苗が良いなら構わんよ。言いたいことはもう言ったし、後は二人で話すといい」

(えっ? 神奈子様?)

あっさりそう告げて、神奈子は席を立つ。

早苗にとっては意外な展開だ。妖怪が突然神社に押し掛けて来た上、巫女を貸し出せと要求してきたのだから、神として苦言の一つも呈するだろうと思っていたのに。それがまさか、無条件で了承するとは……。

それは、パチュリーにとっても想定外だったのか。

お茶が気管に入りゴホンゴホンとむせた後、彼女はおもむろに口を開いた。口の端にお菓子の粒が付いているが、気にする余裕は無いらしい。

「少し驚いたわ。てつきり無理難題を押し付けられるか、ハナから話を聞いて貰えないかも知れないと覚悟してたんだけど?」

「あんた程熟練の魔法使いがわざわざ山を登って頼みに来たんだ。余程困った状況なんだろう? そんなあんたの悩みをウチの巫女が解決したとあればほれ、紅魔館に大恩が売れるってもんだろ。ウチにとっちゃ、麓にシエアを広げるまたとない契機って訳だ」

「……ふむ」

(な、なるほど。さすがは神奈子様、そこまで考えて)

「それに——早苗」

「は、はい？」

「お前にとつても、この魔女の力が必要となる時が来る。そう遠くない未来に、な。」

だから今の内に手伝っておくといい。こいつは魔女だが、受けた恩を仇で返すような性悪じゃない」

「はあ……」

それだけ言つて、神奈子は本殿の奥へと姿を消した。

奥には諏訪子も控えている。きつと二人して聞き耳を立てているに違いないと、早苗は溜息をついた。

神様連中が揃つて引つ込んだ以上、自分一人で対処するしかない。

早苗は諦めて、パチュリーの対面に正座した。

◆ 「さて、それでは本題に入るけど。」

その前に呼び方、早苗で良いのかしら？ 私としては、緑青（みどりあお）巫女つても捨てがたいんだけれど」

「嫌ですよそんな霊夢さんのパチモンみたいな呼び方。早苗で結構です」

「ふむ。それじゃあ早苗。早速だけど、これを見て頂戴」

そう言つてパチュリーが取り出したのは、一冊の分厚い本だった。

黒地に幾重にも装飾が施された表紙には、早苗には読めない文字でタイトルが書かれている。恐らくは魔導書の類だろうが、内容までは分からない。

「あの。この本が何か？ 正直、魔法の類は専門外なんですけど」

「ああ、違うの。これじゃなくて、この中に挟んで……よつと」

(!?) っ、これは！)

パチュリーが本を開くと、ページの間に別の冊子が挟まっているのが見えた。

魔導書と比べると随分薄い。本と言うより雑誌のようだ。見たところ30ページも無さそうだが。

それよりも早苗の目は、表紙に描かれたイラストと、「ぱちえ×こあ！」とギャル文字で書かれたタイトルの方に釘付けになっていた。

「この間書籍を整理してたら見つかったの。一体いつ、どこから紛れ込んだのか……外の世界の書物だとは検討つくんだけどねえ」

「ま、まあそうでしょうね」

(思いつきり同人誌だし。しかも成人向けの)

表紙にはパチュリーと、赤い髪の悪魔が全裸で絡み合っている姿がフルカラーで描かれていた。早苗がかつて女子●生だった頃、外の世界の同人誌即売会で良く見かけた系統の絵だ。絵柄の錬度からして、かなり古参の絵師が描いたものだろう。

にしても、多感な年頃の乙女には少々刺激がきつい絵だ。早苗は直視しないよう注意しながら、震える手でページをめくっていく。

「酷い内容だと思わない？ 私と小悪魔が性交してる様子を延々と、赤裸々に描写してるのよ。」

——ああ、小悪魔っていうのは私の使い魔なんだけどねえ？ 彼女とはあくまで主従関係にあるし、当然恋愛感情なんてものは無い。全く、事実無根も良いところだわ！」

憤懣遣る方無い様子で、パチュリーは「むきゅつ」(↑※ドンツ)と畳を叩いた。

同じ女性として、彼女の怒りは理解できる。自分だって勝手に漫画に出されるのは嫌だし、それがエロ漫画なら尚更だ。早苗はうんうんと頷きながら、更にページをめくった。

「大体、私はこんな貧乳じゃないわよ！」

「えっ、そこですか!？」

「当たり前じゃない！ 胸は女の最終兵器なのよ!？」

(そーなのかい。まあ、自分で言う分には自由ですけども)

先程鉄の輪を外す際に触れた感じからすると、パチュリーは着痩せならぬ着太りするタイプのようだった。特にある部位においてはそれが顕著で、PADでも入れているんじゃないかと邪推したくなるくらいだ。

もっとも、胸の大きさに関しては自分も自慢できる程ではないので、早苗はそれ以上突っ込むのはやめておいてあげた。

「……って、問題はそういうコトじゃないの。」

早苗。見ての通り、この書物は悪意と変態的な性的思考に満たされているわ。危険だと思わない?」

「はあ。まあ私にはいささか刺激が強すぎる内容ですけどね。さつきから鼻血が出そうで困ってますが」

「そう。この本の存在は危険過ぎるのよ。」

特にここ、幻想郷ではね」

「?」

パチュリーの語りが始まる。

早苗は無意識にページをめくろうとする自分を抑え、目の前の魔女へと視線を向けた。先程まで透き通っていた紫色の瞳は今、不安の色で濁っている。

「早苗。貴女は、この幻想郷に『少女(ヲトメ)』が多いと思ったことは無いかしら?」

「——っ——!?!」

「そう。どういう訳だか、この世界には『少女』が多い。

巫女を始め、強力な妖怪のほとんど全てが『少女』。偶然とは考えにくいでしょう。

となれば、こうは解釈できないかしら? すなわち、この世界は『少女で形作られた世界(ガールズ・ブラボー)』なのだ、と」

「そ……それは、つまり」

「そうよ。彼女達の『少女性(ヲトメゴコロ)』がこの世界存続の鍵。もし何らかの要因でそれが失われてしまったなら。幻想郷は、消滅する」

パチュリーの言葉に、早苗は絶句する。

もしもそれが本当であるのなら、今こそ正に危機的状況にあると言えるからだ。

……厚さ10mmもない、たった一冊の同人誌。

そのもの自体は何の脅威にもならない。ただの紙切れだ。

だがそれがコピーでもされ、人里にばら撒かれたとしたら——。

「早苗。正直に答えて。」

この本読んで、少しでもムラツとしなかった?」

真剣な眼差しを向けられ、早苗はごくりと唾を飲み込んだ。

「う………しました」

「やっぱり。貴女もそうなのね。私も性的衝動に駆られたわ。収めるのに時間が掛かっちゃった」

苦笑いを浮かべ、パチュリーはぺろりと舌を出した。

恥ずかしいのか、僅かに紅潮した頬が妙に扇情的だ。実物も本に描かれているように乱れるのだろうかと思像し、早苗は慌てて首を振った。

（だ、駄目よ私！ いやらしいことを考えたら、この世界が……何よ、パチュリーさんに失礼だわ！）

「？ どうしたの早苗？」

「い、いえ。でもそんなに危険なモノでしたら、処分してしまえば宜しいのでは？」

「分かってる。私だって何度も燃やそうとしたわ。……でも、できなかった」

「どうしてですか？」

「——切ないの。この本が消えてなくなるのかと思うと……もう二度と読めなくなるのだと思うと、胸の奥が苦しくなるのよ」

（パチュリーさん）

それは十分中毒ですよ、とは早苗には言えなかった。

パチュリーは今にも泣きそうな顔で「ぱちえ×こあ！」本を見つめている。事実無根、酷い内容だと罵りながらも、心の奥底では必要としているのだ。そして、そんな感情を抱いている自分に戸惑いを覚えている。

それが理解できたからこそ、早苗はパチュリーに協力する気になった。世界の危機とか、紅魔館に恩を売るためとか、そんなことは関係無い。ただ純粹に、共感できたから。

「だから私、どうしたら良いのか分からなくなつて。

麓の巫女に相談しても、まともに取り合ってはくれなかったし……気が付けば、貴女を訪ねてた。

お願い早苗。貴女の力で、この淫らな気持ちを浄化して」

「それは」

早苗の専門は風祝。本来それは、風の神様を鎮めるための神事である。

だから厳密な意味での浄化能力は本職の巫女に劣る——のだが。

「分かりました。やってみましょう」

救いを求める者に手を差し伸べてこそその神。

それができなくて、何が現人神か。

早苗は力強く頷き、パチユリーの手を取った。

「私に任せて下さい、パチユリーさん。」

この異変、必ずや私が解決してみせます！」

第2話

すっかり夜も更けた守矢神社。

神様達が寝静まった神殿からは、ただ風が戸板を叩く音のみが聞こえて来る。

鳴く虫の居なくなった、静かな初冬の夜。

冷気に火照った身体を冷やされ、早苗はぶるっと身を震わせた。浴衣の上にとてらを一枚羽織っただけではさすがに寒い。風邪をひかないようにしなければと、宿舎へと急ぐ。

「あら。もうお風呂上がったの？」

部屋の戸を開けると、パジャマ姿のパチュリーが出迎えてくれた。

緑地に青色の水玉模様が施されたパジャマである。早苗が外の世界に居た頃着ていたお古だが、小柄なパチュリーにはぴったり合っているようだ。主に胸の部分が。何気に生地には耐水性の霊符が縫い込まれており、霊的防御効果もあったりする。

「ええ。いい湯加減でしたよ。出汁が良く利いてて。」

パチュリーさんももう一風呂どうですか？　まだお湯残ってますけど」

「出汁？　……いえ、やめとくわ。湯冷めしそうですもの」

寒いのだろう。パチュリーは布団に足を入れて、魔導書を読んでいた。どこに隠し持っていたのか、黒縁の眼鏡を掛けている。こんな時まで本、か。余程好きなんだなと感心しながら、早苗も隣に布団を敷いた。

「ねえ。パチュリーさんって、本ならどんな本でも好きなんですか？」

「ええそうよ。本は知識の源泉だもの。私の知らない色んなことを彼らは教えてくれるわ。それは、何も魔導書に限った話じゃない」

「なるほどー。あ、私も外の世界に居た頃は結構読んでたんですよ？」

ここに來てからは手に入れ辛くなったのであまり読まなくなりましてけど」

「あらそう？　じゃあ紅魔館に來ると良いわ。ウチの図書館に無い本なんて、この幻想郷にはほとんど無いんだから」

(やっぱり本の話題だと嬉しそうですね、パチュリーさん)

普段愛想の無い魔女が見せた、束の間の微笑。

その笑顔をいつか自分のためにも見せて欲しいと、早苗は願った。

「だけど」

「はい?」

「私の知らないこともまだまだ多いのね。今回のことで、それを思い知らされたわ。」

自分自身のことさえ分からないんだもの。きっと他人を理解することなんて、一生かかってもできないんだと思う」

「パチュリーさん……」

いつに無く弱気な口調で、パチュリーはそう呟いた。

どうやら早苗が思っていた以上に、彼女は苦しんでいるようだった。

「だから聞かせて? 貴女のこと、この神社のこと。それから、外の世界のことを。」

早苗。他の誰でもない、貴女の口から聞きたいわ」

そして、自分を頼ってくれている。

少しずつではあるが、心を開き始めてきているのだと思うと、早苗は嬉しくなった。

「はい! 私で良ければ、喜んで!」

「ふふっ、ありがとう。」

ではまず、スリーサイズから聞かせて貰おうかしら」

「はい、では胸囲から——って、えええっ!?!」

「ふふっ。冗談よ」

(思考回路がすっかりオヤジ化しちゃってますよパチュリーさん……やはりあの同人誌の影響を受けて……って)

そこまで考えが及んだところで、早苗は気づいた。

「ば、パチュリーさん」

「ん? どうしたの? 私の顔に菓子粒でも付いてる?」

「今は付いてないです。それよりパチュリーさん、その本」

「え? この魔導書がどうかして——」

早苗に言われるがまま、パチュリーは手にした魔導書へと視線を戻し。

開いたページを目にした瞬間、硬直した。

『ばちえ×こあ！』

とつげき！　ふうじんろくくまうんてん・おぶ・えくすたしーく
そこにははつきりとそう記されていた。

またしてもギャル文字で。

「……………」

「……………」

二人して無言で見つめ合う。

何となく気まずかった。例えて言うなら、今晚のオカズを選別中に母親に見つかつた男子中学生の気分だ。或いは、本番真つ最中に。逆に、母親の立場になつてみても良いだろう。できれば何も無かつたことにしてしまいたい、そんな気分。

しかし。いつまでも、沈黙を保っている訳にもいかない。

とりあえず早苗は、思い切つて枕をパチュリーの顔面にぶつけてみた。

「むきゅー。いきなり何するのよう」

「やかましいです！　何でこんな所にこの本があるんですか!?　私、タンスの奥にしまつておいたはずなんですけど!?!」

「いや、つい。ほら、無意識で」

「無意識と聞くとあの妹様を思い出しちゃいますからやめて下さい！

　　どんだけ毒されてるんですか貴女!?!

没シユートです！　今度こそ、二度と手の届かない場所に封印します！」

「い、嫌！　それだけはやめて！

　　この本が枕元に無いと眠れないのよ、私！」

「問答無用です！」

「い、いやあ……………」

無理矢理奪い取ろうとすると、パチュリーはいいやいやと身をよじつて抵抗して来る。それでも身体能力ではこちらが上回っている。瞬

く間に早苗は彼女を組み伏せた。

「さあ覚悟して下さい——って」

「……………」

(な、何この状況？ これじゃまるで、私が押し倒してるみたいじゃない)

諦めたのか、パチキュリーは潤んだ瞳でじっと見上げて来る。見つめ合っている内に、自然と頬が紅潮して来た。

布団の上、乱れた着衣。今正に取り上げようとした同人誌の中身を思い出し、早苗はどくんと心臓が高鳴るのを感じた。

これだけは言える。この状況は、極めてまずい。

「ねえ。早苗」

「な、何ですか」

「どうしても封印するの？ 今夜だけでも、駄目？」

「あ、当たり前でしょう！ 私は貴女の魂を浄化しなければならいんですから。それに、幻想郷の危機だって」

「そう……………だったら」

——貴女が代わりに慰めてくれる？

その瞬間、確かに。

くすりと、彼女は嘲笑(わら)っていた。

早苗は思い出す。この人は魔女なのだ、と。

もし、同人誌など関係無く、最初から穢れているのだとしたら。

浄化を引き受けてしまった時点で、自分は彼女の罠に掛かっていたことになる。

演技だったのか？

今までの、何もかもが。

「それも冗談、ですか？」

「さて、どうかしら。」

ただ、興味はあるかもね。神に仕える巫女が、どんな風に乱れるのか

「……………悪趣味ですね。だから私を選んだんですか？」

「それは、貴女の想像に任せるわ。」

ただこれだけは言える。私は、巫女が大嫌い」
「くっ……！」

平手で彼女の頬を張った。
やっつけてしまってから、それこそ彼女の思い通りだと気づくがもう遅い。

張った手の痛みが、後悔へと変わる。もう、後戻りはできない。

「何？ 泣いているの？ みつともないわね」

「わ、私は」

「無様ね。そんなだから博麗の巫女に敗れるんだわ。あの子はこの程度の誘惑には微塵も揺るがなかった。それどころか、私の存在自体眼中に無かったわ。」

「だけど貴女は私を受け入れてしまった。それが貴女の敗因ね」

「だって、私は」

「他者に依存しなければ生きていけない貴女に、他者を救うことなんて決してできやしない。なのに、私を救うと？ 思い上がりも甚だしかったわね。」

「さあ、このゲームはもう終わり。私の勝ちよ」

あくまでも冷静な口調で勝利を宣告する彼女が、今はこの上なく憎らしく思えた。自分がこれまで必死になって取り組んで来たことは何だったのか。全ては無駄だったのか？ 何も、彼女には伝えられなかったのか——そう思うと、悲しくて、堪らなくなつて。

「私はっ……友達だと、思っていたんですよ……？」

「とうとう、早苗は己が感情を爆発させていた。」

◆

「私はっ……友達だと、思っていたんですよ……？」
「……………」

そう言つて、早苗は涙目で睨み付けて来る。

パチュリーは、そんな彼女を真っ直ぐに見上げていた。

「友達だから、助けるのが当たり前じゃないですか。」

「それじゃ駄目なんですか？ 私は、間違っていたんですか？」

「そんなの」

駄目に決まってるじゃない。

言い掛けた言葉を飲み込み、パチュリーは早苗の頬を撫でた。

透明な雫が垂れ落ちて来る。七曜を操る魔女には、それが純粹な悲しみの涙であると分かっていた。

だからこそ美しく、そして儂い。

当の昔に自分が失ってしまったものを、この巫女は持っている。

それは何者にも縛られず、故に何者にも平等に接する博麗の巫女にも無い物だ。

今日一日で、痛い程に理解できた。

だから早く終わらせようと思った。羨ましかったから。

終わらせなければ、殺してしまうと思った。その時点で、自分の敗北は確定だった。

幸いにも、その前に終わらせることができた。だから今回は勝ち。

だけど本当は——救われたかったのかも知れない。

「私は、巫女が大嫌いだけど」

「……………」

「東風谷早苗の人間性は、認めているつもりよ」

「え？ それって」

「……悪かったわね」

視線を逸らし、パチュリーは呻くようにそう呟いた。頬が熱くなるのを感じながら。

それを聞いた途端、早苗の表情がぱあつと明るくなった。つい今しがたまで泣いていたのに、現金な娘だ。

「ぱ……ぱちゅりーさあああああん」

「なっ!? ちよ、ちよつと、急に抱きつかないでよ!？」

私にも心の準備つてものがっ……………」

「私嬉しいです！ パチュリーさん、私のこと友達だっと思っててくれたんですねっ」

「へ？ そんなこと言った覚え無いわよ」

「いーえ言いました！ 私ちゃんと聞いたもん！

えへへ。やっとな私、ここでお友達ができました」

(あ……)

そういえば、と思い出す。この巫女は、元々外の世界の人間なのだ。幻想郷に来て日も浅く、周りに居るのは誰に対しても無関心な紅白巫女と、掴みどころの無い黒白魔法使い。友と呼ぶには、あまりにも薄情な奴らばかりだ。

だからか。早苗がここまで、「友達」という言葉に拘り続けていたのは。

愚かだ、と嗤う自分が居る。

一方で、そんな彼女を眩しいと思う自分が居る。

彼女は未熟だ。これから様々な経験を積み重ねていく内、人生には裏表があることを悟るだろう。その時までこの輝きを放ち続けていられるかどうか。

(ふふっ……見物ね)

パチュリーはようやく理解した。

終わったはずのゲームは、第二章の幕を開いていたのだ、と。



翌朝の守矢神社。

風祝であり巫女でもある早苗は、朝早くから両方の業務に追われていた。朝霧に包まれた境内を掃いたり、神より賜った霊水(※決して涎ではない)を撒いて清めたり。特に今日は、完成したばかりの茅の輪を鳥居に奉るという大仕事が続いていた。

「祓へ給へ 清め給へ 守り給へ 幸へ給へ」

昨日の諏訪子の言葉を思い出し、念のために潜ってみる。奉り潜るという行為自体が立派な神事であるため、唱え詞も忘れない。

「——うん。これで準備おっけーね」

自分で潜ってみて、出来栄えに満足する。後は小祓の本番を待つばかりだ。

うきうきとした気分、早苗は社へと歩き出した。

お膳を持って食堂に行くと、既に神様二人が座っていた。年の所為か、神様の朝は早い。

(思った通りというか何というか。パチュリーさんはまだ寝ているよ

うですね。

まあ昨晩は色々と盛り上がりましたからねえ。パチユリーさんたらあんなに激しく……じゅるり)

脳内で展開されるピンク色の妄想劇場のことなどはおくびにも出さず。

「おはようございます、神奈子様、諏訪子様」

「ああ。おはよう、早苗」

「おっはよーん」

早苗が挨拶すると、二人はそれぞれ、読んでいた新聞から目を上げた。

「珍しいですね。お二人が文々。新聞を読むなんて。前に、天狗の書く話はミーハーだから嫌いだと仰ってませんでしたっけ」

「まあ、たまにはね。気になる記事があったものだから」

「そーそー。面白い記事があったのだよー」

お膳を差し出ししながら尋ねると、二人はにやにやと笑みを浮かべて応えて来た。

余程面白い話でも書いてあったのだろうか。文々。新聞の熱心な購読者である早苗としては気になるところだ。

「へー、どんな内容なんですか？ 私にも見せて下さいよ」

「いや、これは。見ない方が健全だと思っよ」

「てゆか、早苗にはまだ早いと思うよー。ほら、早苗って精神がお子ちゃまだし？ カラダの方もまだまだただけどねっ」

(諏訪子様にはだけは言われたくないですがっ)

「そう言われるとますます気になっちゃうじゃないですかあ。もう、意地悪言わないで見せて下さいよー仲間外れは寂しいですよー」

「そう言われてもなあ……あ、こら、覗き込もうとするな！」

「ほらね。そういうところがお子ちゃまだって言うんだよ」

(あーまた言った！ 私、お子様じゃないもん！)

諏訪子はともかく、神奈子までもが頑なに見せようとしなのが気になった。折角用意した朝ご飯を食べるのも忘れて、早苗はどうしたら読むことができるか考える。

一瞬。そう、一瞬の隙さえ作れば十分だ。そのためには。

「あつ、あんなところに禪一丁の香霖堂さんが！」

「ふっ。馬鹿だね早苗」

「そーそー。私らが今時そんな古典的な手に引つ掛かる訳無いじゃんねー？」

「罨に掛かったミスティア・ローレライを食べようとしています！主に性的な意味で！」

「何イツ!?!」

(駄目だこの神様達早く何とかしないと。なんてね)

嘘にあつさり引つ掛かり外に飛び出して行つた神様達を見送りながら、早苗は二人が読んでいた「新聞」を取り上げた。

「さてさて、邪魔者が居なくなつたところで。どんなこと書いてるのかなーっ」と

期待に胸を膨らませて、彼女はページをめくり。

『ばちえ×こあ！』

とつげき！　ちれいでんくじゆうかんぢごくへんく

『ばちえ×こあ！』

とつげき！　せいれんせんくせーいきにかけて!く

……目にしたギャル文字の二大タイトルに、眩暈を覚えた。

第3話（最終話）

「大体、早苗には神を敬う気持ちが足りないのよ！」

「そうよ、あんたはコアックマ様の良さを何も分かってない！」

「育て方を間違えたのかしら？ 昔のあんたは、神を騙すような不届き者ではなかったのに！」

「そうよ、あんたは全くもって不届き者だわ！ コアックマ様は貧乳派なのよ！ 乳はでかけりや良いってもんじゃない！」

「本当にあんたと来たら——」

「コアコアコアコア——」

（はあ）

余程森近霖之助とミスティアの痴態が見たかつたのだろうか。神奈子&諏訪子のコンビに物凄い剣幕で叱られ、早苗は胸中で溜息をついた。

（面倒なことになりました。こんなことになるんでしたら、もっと現実に起こりそうなことを言うべきでした。例えば、博麗神社が直下型地震で倒壊したとか、魔理沙さんが妖怪茸を食べて八頭身になったとか。

にしても、さつきからコアコアと五月蠅いですね——つて。こあ？）

そこまで思考を巡らせたところで。

早苗は、「コアックマ」という単語に聞き覚えがあることに思い当たった。横目でパチュリーの方を見やると、彼女も気づいているらしく、頷きを返して来る。

「あの一、お二人とも？ コアックマって、もしかして」

余計な怒りを買うのは覚悟の上。確認しようと、早苗は恐る恐る神奈子と諏訪子に向かって口を開いた——が。

「良く考えたらこの子、あんたの血を引いてるんだったわね。諏訪子。所詮蛙の子は蛙、血は争えないものねえ」

「風祝としての教育を施したのはあんただけどねえ神奈子？ 全く、あんたさえ居なければ洩矢の王国は千年安泰だったのに」

(つて、あれれ?)

睨み合う守矢の二柱。いつの間にか自分が蚊帳の外に出されていることに、早苗は気づいた。どうやら、火薬庫に火を点けてしまったらしい。

「あのー……もしもーし?」

「うっさい! 早苗は黙ってな!」

「……………」

二人に黙っていると言われてしまつては、それ以上何も言うことはできない。早苗はパチュリーを促し、今にも血の雨が降り出しそうな食堂を後にした。

三冊ある「ぱちえ×こあ!」本の最終ページを確認すると、そこにはいずれも同一の作者名が記されていた。

コアックマ。すなわち、「小悪魔」と。

「信じられない。てつきり、外の世界の本だと思つてたのに」

廊下を連れ立って歩きながら、呻くようにパチュリーは呟いた。それは早苗も同じ気持ちだった。まさか登場人物の片割れが作者だとは、まず考えもしない。だからこそ、今まで見過ごしていたのだ。

しかし。仮にそうだとすれば、一応全ての説明がつくのだ。

「これは私の推測に過ぎませんが。この本は小悪魔さんの、鬱屈した願望を描いたものなんじゃないでしょうか」

「小悪魔が私と、この本の中みたいに関係になりたいと願っていると? ありえないわ、そんなの。だって私はあの子の主人だもの。あの子にとつては、目の上のたんこぶみたいな存在でしょうよ」

「でも。もし小悪魔さんがパチュリーさんのことを疎ましく感じているのなら、百八冊もの同人誌を書いたりするでしょうか? しかもその大半は、彼女とパチュリーさんとの間の肉体関係を描いたものなんでしょう? これらの事実、小悪魔さんが貴女と元々親密な関係にあるか、或いは親密な関係になりたいと願っていることを意味していると思います」

「……勝手な想像だわ」

早苗の推測が気に入らないのか、パチュリーはふん、と鼻を鳴らし

た。

彼女の気持ちは分からないでもない。誰だって、自身の私生活についてあれこれ詮索されるのは嫌なものだ。ましてやそれが恋愛話（コイバナ）ならば、尚更である。

しかし。もしかしたらこれが、事件解決の糸口となるかも知れないのだ。

「ねえパチュリーさん。小悪魔さんと一度お話してみませんか？」

思い切って早苗が提案してみると。

パチュリーは一瞬露骨に嫌そうな表情をした後、ふと足を止めた。

「？ パチュリーさん？」

「いいわ。私としてもすつきりしないのは嫌なもの。

貴女の誘いに乗ってあげる。だけど」

後悔しても知らないわよ？

不敵に笑った彼女は、すっかり魔女の顔に戻っていた。

◆

宿舎に戻ると、パチュリーは新聞紙の上に魔法陣を描き始めた。

恐らく畳を傷めないための彼女なりの配慮だろうが、文々。新聞の愛読者である早苗としては少し悲しいものがある。

「あ、星マーク良いですよ。私も好きです」

「私の呪術を貴女のチンケな奇跡なんかと一緒にしないで頂戴。

それより、今更だから言うけど、神社の中に穢れを持ち込んで良いのかしら？ まあもう手遅れなんだけどね」

「え？ 何か問題あるんでしょうか。うちの神様ってある意味穢れまくってますから、今更多少増えても大丈夫な気がするんですけど」

「……ある意味、あんたが一番穢れてるのかもね。後で告げ口しておこうつと」

などと無駄口を叩きながらも、パチュリーは筆を走らせていく。

程なくして。西洋の魔術式に五行思想を取り入れた、彼女独自の魔法陣が完成した。

「さて、これで小悪魔召喚の陣は出来た訳だけでも。

彼女は人見知りする性格だから、貴女を見て怯えるかも知れない

わ。いきなり弾幕を撃って来る可能性だつてある。覚悟は良いかしら？」

「大丈夫ですよ。私、こう見えて結構頑丈なんです。矢でも鉄砲でもどんと持つて来て下さい」

「そう？・じゃあいくわよ」

パチュリーは息を吸い込み、「ゴホッ、ゲホッ」と軽くむせた後、気を取り直して再度息を吸い込んだ。吐き出す息と共に、彼女は呪文を紡ぐ。

「りりかる・まじかる・きるぜむおーる、我は求め訴えたり！

出でよつ、第一使徒・コアクマー！」

（あ、小悪魔って本名だったんですね。てつきり通称と思ってました。てゆか、色々とパクリ過ぎですよパチュリーさん。著作権を何だと思ってるんですか）

パチュリーがノリノリで叫んだ瞬間、ボンツと音を立てて新聞紙から煙が上がる。

もうもうと立ち昇る白煙の中に、それまで存在していなかった気配が生まれた。果たしていかなる弾幕が襲い来るかと早苗は構え。

——直後。予想だにしていなかったモノを目撃し、啞然とした。

晴れた視界に、小悪魔の姿が映し出される。

同人誌で見たのと同じ、紅い髪に紅い眼をした少女だ。背中に生えた蝙蝠のような一對の翼は、彼女が人外の者であることを表している。

そんな彼女が、新聞紙の上に立ったまま、自身の胸元と股間を押さえていた。隠すのも当然だろう。彼女はほとんど、全裸に近い状態だったのだから。華奢な体に似合わずたわわに実った双丘が、彼女の手の中でぷるんと揺れた。まるで西瓜だ、伊吹萃香に非ず。

紅い瞳が、こちらを呆然と見つめて来る。自然と目が合った。

（何故に裸。い、いえ、そんなことを気にしてる場合じゃないよねっ）

いきなり召喚され、彼女も混乱しているに違いない。できるだけ彼女を刺激しないよう注意しながら、早苗は口を開く。

「あの一」

「あ、いえ。どちらかと言うと気持ち良かったと……あいたあつ!？」

無言で頬つぺたをつねると、早苗は堪らず悲鳴を上げた。

「全く、巫女つてのはどいつもこいつもふざけた思考回路の奴ばかりなのかしら。折角人が心配してあげたつてのに!」

「むー、私を霊夢さんと一緒にしないで下さいっ! これでも外の世界に居た頃は才色兼備で通つてたんですよ?」

あーでも、心配してくれたのは嬉しいです。ありがとうございます
す

「ふ、ふん。今頃お礼言つたつて遅いのよ」

「あーっ、パチュリーさん照れてる。可愛い」

「ば、馬鹿。何言つてんのよ、もうっ」

可愛いと言うなら、サラシ一枚だけの今の早苗も十分に可愛いと思
いながら、パチュリーは冷やしたタオルを彼女の額に掛けてやった。

「あー冷たくて気持ち良いですパチュリーさん」

「そう? 冷やし過ぎてないか心配だったんだけど」

「大丈夫! その場合は人肌の温もりで——あいたたた」

言い掛けて。痛みに顔をしかめ、早苗は身をよじった。

「うーん。サラシがきついのかしら」

「あ、そうかも。ちよつと緩めて貰つてもいいですか?」

「いいけど。変な気、起こさないですよ?」

「……普通それつて、される方が言う台詞だと思えますが」

早苗の望み通りに緩めてやると、色白い胸元が露わになった。普段
巫女服に包まれている部分だけあつて、まるで日に焼けていない。素
肌浮かび上がった青白い血管を見て、パチュリーは思わず溜息を漏
らしていた。

「はあ。綺麗ね」

「え?」

「何でもない。どう、少しは楽になった?」

「はい、おかげさまで」

そう応えて、早苗はにっこりと微笑んでみせた。その笑顔がパチュ
リーには眩しく映る。警戒心の欠片も無い、無垢なる微笑。この子は

自分とは違うのだと、今更ながらに思い知った。
(友達。そう、友達なのよ早苗にとっての私は。

でも……私は……)

「ところで、小悪魔さんのことなんですけど」

「そうよ……私は、この子のことを」

「? パチュリーさん?」

「あつ……な、何かしら?」

名前を呼ばれ、パチュリーはハツと我に返る。

今のは危なかった。危うく本心が口から漏れるところだった。

「ああ、小悪魔ならさつき還ったわ。貴女には申し訳無いことをしたって謝ってた」

「そうなんですか。……あ、いえ、そうじゃなくてですね」

「ああ。例の本のことならね——」

だが幸いにも、早苗は自分の気持ちよりも小悪魔のことが気になっていようだった。そのことに胸中で安堵しつつ、パチュリーは先刻あつた出来事を語り始めた。



泣き叫び、出鱈目に暴れた拳句、紅い少女は凍った湖の上に倒れ伏していた。

寒さと恐怖で全身をぶるぶる震わしながら、彼女は何か立ち上がろうとする。だが右足に走る激痛に、再び倒れた。太腿に撃ち込まれた楔型弾の傷痕から、じくじくと血が溢れ出している。

「全く。手間を掛けさせないで頂戴」

「——っ——!?!」

背後からの声に慌てて振り返るも、そこに居たのは先程の巫女ではなかった。

「……パチュリー様……」

見慣れた主人の顔を見、小悪魔はほっと胸を撫で下ろし掛けて。

楔弾を撃ち込んだのが他ならぬパチュリーであることを思い出し、慌てて後ずさった。

「賢明な判断ね。そうよ、私は怒っているわ」

「ひっ……！」

氷よりもなお冷たい視線を向けられ、小悪魔は堪らず悲鳴を上げる。咄嗟に逃げようとするも、立つことさえ満足にできない今の身体で魔女から逃れられる訳もなく。

パンツ、と頬を叩かれた。

「今のは早苗の分。どう、少しは落ち着いた？」

「うっ……」

「全く、貴女って子は。馬鹿ね。ほんとに馬鹿」

「ご、ごめんさ」

「その言葉は早苗に言っただけなさい。それに貴女には、他に言うべきことがあるはずよ。」

「こあ。貴女、この本に見覚えは無いかしら？」

「……………」

そう言っただけパチュリーは、一冊の魔導書を取り出した。

小悪魔は悪魔だが、魔法の類が得意な訳ではない。そんな自分に何故パチュリーが魔導書を見せるのか分からず、戸惑っている。

次にパチュリーは、本のページをめくり始めた。一ページ一ページ、何かを確認するかのよう丹念にめくっていく。

やがて、あるページに辿り着いた時。パチュリーはふと、めくるのを止めた。

「っ!? ああっ……そんなっ……!？」

そこに在るモノを見て、小悪魔は思わず叫びを上げる。

その反応で何かを確信したのか、パチュリーは溜息を一つついた。

「やっぱり。これを描いたのは、貴女だったのね？」

「……はい」

確認するように訊いて来るパチュリーに、うなだれて小悪魔は応える。認めるしか無かった。既に王手は指されていたのだから。

そのページには確かに、自分の描いた同人誌が挟み込まれていた。

「何故こんなものを描いたの? しかも主人である私に黙って。」

「答えなさい、小悪魔」

「そ、それは」

言いたくなかった。質問に答えることはそのまま、主への秘めたる想いを告白することに等しかったから。けれど使い魔である自分には、主の命に逆らうことはできない。

「わ、私は」

震える唇で、小悪魔は言葉を紡ごうとし。

「ああ。無理に答えなくても良いわ」

（——え？）

その唇を指で塞がれ、それ以上続けることができなかった。

「私は貴女の主人よ？ 聞かなくても、貴女の表情から推察することはできる。

知らなかったわ。まさか貴女が、私のことを好いてくれたなんて、ね」

（あ……）

よしよしと頭を撫でられる。いつの間にか、パチュリーは微笑んでいた。

「ごめんね、こあ。貴女の気持ち、気づいてあげられなくて。

そしてありがとう。私を愛してくれて」

（……パチュリー様……）

徐々に、足の傷の痛みが和らいでいく。主人が治癒の魔法を掛けてくれているのだと気づき、小悪魔は胸が熱くなるのを感じた。

「けど、ごめんなさい。私は、貴女の想いに応えてあげられない。

私にはもう、好きな人が居るから」

「……………」

言われなくても、そんなことは分かっていた。この片思いは、決して報われることは無いのだと。分かってはいたけれど、本人の口から聞かされるとショックだった。

ぼろぼろととめどなく、涙が頬を零れ落ちる。

「悪かったわね。着替えの最中に無理矢理呼び出した挙句、こんなことを聞かせたりなんかして」

その涙を、パチュリーはそっと拭ってくれた。

「い、いえ、私の方こそ、びっくりして取り乱したりして、済みません

でしっ……くしゅんっ」

謝ろうとして、空気を読めなくしやみが出た。

パチュリーは少し驚いたような顔をした後、笑って小悪魔を抱き寄せる。温かな彼女の熱が、冷え切った身体を優しく包んでくれた。

自分の想いを知ってなお、彼女は自分のことを嫌いにならずに居てくれる。それが嬉しくて、小悪魔の瞳に新たな涙が浮かんだ。

「ううっ……パチュリー様あ」

「ごめんね。私にはまだやることがあるから、貴女と一緒に帰る訳にはいかない。

でも、必ず戻るから。貴女は、紅魔館で待ってて頂戴」

そう言ってパチュリーは、愛用の紫色のローブを小悪魔の肩に掛けた。

「え、これ、パチュリー様の服じゃ」

「私なら大丈夫。早苗が貸してくれた服があるからね。

ああ早苗ってのはさつき貴女の弾幕モロに食らった子で、本当はこの神社の巫女とかやつてるんだけど、ええと」

「分かってます」

主人が従者を理解したように、従者もまた、主人の気持ちを理解していた。今までずっと、誰よりも近くで付き添って来たのだ。誰よりも分かっていた。

「パチュリー様にとって一番大切な人、ですよね」

◆
「にっこりと微笑んで、小悪魔はそう答えた。

「てなコトがあつてねえ。サインまで貰っちゃったっ」

（人が痛みを苦しんでる時に、この人は）

弾んだ声でサイン入り同人誌を見せて来るパチュリーを、早苗は恨めしく思った。

「てゆか、駄目じゃないですか。これじゃますます同人誌にハマっていく一方ですよ？ 幻想郷の危機とか何とか言ってた割りに、案外暢気なもんですねー」

「あら、それなら大丈夫だと思うわよ？

小悪魔はもう二度と描かないって約束してくれたし、それに私だって、もっと大切なものを見つけることができたしね。いつかきつと、百八冊全部を処分できる日が来ると思うわ」

根拠でもあるのか、パチユリーは自信満々にそう宣言してみせる。

「大切なもの？ 何ですかそれは」

「ふふっ、それは秘密よ」

（そんなこと言っつて、今度は『ぱちえ×まり』本とか『ぱちえ×あり』本とか言い出すんじゃないでしょうねえ……でもまあ）

悪戯つぼく微笑むパチユリーを見上げている内に、早苗は何だか、温かな気持ちに包まれていくのを感じていた。

（パチユリーさんが良いって言っただけなら、この異変は解決ですね。

——あ。『さな×ぱちえ』本だったら読んでみたいかも。なんて）

「ねえ、パチユリーさん」

「ん？ 何、早苗」

「何だか眠くなって来たので、その。」

膝枕とか、していただけないでしょうか」

「……それって私にずっと座ってろってこと？」

「あはは。冗談ですよ。嫌ですよ、そんなの」

早苗が笑って言うと、パチユリーはすつと立ち上がり。

「ううん。嫌じゃないわ」

そう応えて、早苗の枕元に正座した。

「え？ パチユリー、さん？」

「何よ。してあげるって言っただけだから、さっさと頭上げなさいよね？」

「それとも何？ 私の膝じゃ、枕代わりにもならないって言う訳？」

「い、いえ……」

パチユリーの大腿部に頭を乗せると、彼女の体温が直に伝わって来た。そして、彼女の柔らかさも。少しドキドキしながら早苗が見上げると、パチユリーと目が合った。やはり彼女も気恥ずかしいのか、僅かに頬を赤らめている。

「あの、パチユリーさん」

「な、何かしら」

「ありがとうございます。私、嬉しいです」

「そ、そう。じゃあさっさと寝なさい。こうしていると疲れるから」

「は、はい……でも」

「何よ？ まだ何かあるの？」

「……そんなに見つめられてたら、眠れないですよ……」

こうして、二人の時間は過ぎて行く。

移り行く季節と共に。

◆ ◆ ◆
秋の終わりは、同時に長い冬の始まりでもある。

茅の輪の礼は本来、冬の間秋の神様にゆつくり休んで貰うための儀式だった。

「祓へ給へ 清め給へ 守り給へ 幸へ給へ」

なのに、代わりに潜るのは祟り神でもある洩矢諏訪子。

（何か釈然としないものを感じるけど、これが形骸化した祭りの有り様って奴なのかもねえ。まあ、怖い神様のご機嫌取りも大事なことはあるんだろうけど）

諏訪子が輪を潜る様子を遠目に眺めながら、パチユリー・ノーレッツジは「むきゅー」（↑※ふうー）と溜息をついた。

「幻想郷最大の危機は去った。秋休みの儀式も終わった。

なら、もう私がここに来る理由は無いのね」

「あら、そんなことは無いですよ？ はい、お饅頭」

「むきゅ。ありがと」

早苗に渡された饅頭を一口齧り、パチユリーは顔を緩ませる。

「美味しい！ これ、貴女が作ったの？」

「そうですよ。夏になれば『饅頭祭』を催す予定なので、今から練習してるんです」

「ふうん。変わったお祭ねー。神様と何の関係があるのかしら」

「無病息災を祈願するお祭なので、パチユリーさんにぴったりだと思いますよ？ 是非ともいらして下さい」

「ふん。皆が言う程病弱じゃないわよ、私」

ムツとしてパチュリーが文句を言う。

「うふふ」

何かおかしいなこともあったのか、早苗は笑みを零した。

「な、何笑ってんのよ。薄気味悪いわね」

「いえ、パチュリーさんと最初に逢った時のことを思い出しまして。

あの時のパチュリーさんと今のパチュリーさん、まるで別人みたいだなあって」

「あら、それは早苗も同じじゃない。

最初貴女、私のこと警戒してたでしょ？ 少なくとも妖怪として見てくれたわ。

なのに今ではこの有様。一妖怪としては、ちよつと寂しいものがあるわね」

(でも、こういうのも悪くないかもね)

春一番ならぬ、冬一番の木枯しが頬を撫でる。

そろそろ頃合だろうと、パチュリーは思った。

「さて。これ以上寒くなると風邪ひいちゃうから帰るわね。

お饅頭美味しかったわ。ご馳走様」

「えー、大祓までゆつくりしてって下さいよー」

「私に凍死しろって言うの？」

「案外冷凍保存できたりして」

「私はシベリアのマンモスとは違うのよ。とにかく帰るわ。紅魔館の皆も心配してるだろうし——小悪魔にも待ってて貰ってるしね」

「はい。では今度は、私からそちらに伺いますね。小悪魔さんにも宜しく言っておいて下さいっ」

「ふふっ。その時は紅魔館流の歓迎の仕方でお迎えさせて貰うわね」

ふわふわと風に乗る、パチュリーは空へと浮かび上がる。彼女が独自に編み出した、「最も疲れない飛び方」だ。要は風任せなのだが、幸いにも今回は、風祝が麓まで運んでくれる。

守矢神社の方を振り向くと、豆粒程の大きさになりながらも、早苗が手を振っているのが見えた。こちらでも振り返すべきか迷ったが、結局は何もせず。ただ、

「またね」
とだけ、眩いた。